

広報

第64号



平成28年2月

巻頭特集

自死にどう向き合おうか

於「サロン」よってたもれ」(秋田県藤里町)

被災地のお寺は今

岩手県 普門寺 熊谷光洋

教化センター設立 40周年記念事業

法話

「仏の誓願」

教化センター 布教師 佐藤道彦

布教師紹介

平成27年度 行事報告

禅をきく会

曹洞宗婦人会東北管区研修会

青少年教化指導者研修会

第45回 教化フォーラム

特派布教と青森県伝道車巡回布教

布教講習会

布教師特設検定会

平成28年度 禅をきく会 ご案内



曹洞宗東北管区教化センター

〒981-3117 仙台市泉区市名坂字榴町169-4

TEL.022-218-1381 FAX.022-218-1382

<http://soto-tohoku.net/> e-mail: kyouka@seagreen.ocn.ne.jp

座談会

自死に どう向き合うか

お寺について、僧侶について生まれて、死ぬまで

平成七年から平成二十五年まで十九年続いた秋田県の自殺率全国一位（人口十万人比の自殺者数）が、平成二十六年に全国二位となった。この事を受けて秋田県での活動や東北全体の現状などを三名のバネリストを迎え座談会を行った。「自死にどう向き合うか」をテーマに藤里町宝昌寺住職新川泰道師がコーディネーターを務めた。

「自己紹介をかねて」これまで自死に関わってきた事についてお話し下さい

【黒澤】私は本業が精神科医で、今行政の専門相談機関に勤めていますので、公衆衛生や精神医学の視点から自死にどう向き合ってきたのかをお

話したいと思います。

精神科医になったきっかけに、自死遺族の問題がありました。当時は学生で救急センターなどで自死遺族と向き合う事があり、二十年近くこの問題に関わってきました。

【金子】曹洞宗総合研究センター（以下、「総研」と記載する）「曹洞宗」この問題研究プロジェクト」の座長として、平成十九年より、当初は現代社会における宗教者、宗侶の社会的役割とは何かを主眼に据えて研究を進め、その成果として「人びとのこころに向き合うために」を刊行した。

このテキストをもとに、「現職研修会」、「寺族研修会」などの研修会を行わせていただき、さまざまな人びとのこころに向き合う活動、最終的に

岩手県精神保健福祉センター所長

黒澤美枝氏



金子宗元老師



曹洞宗総合研究センター研究員／長禅寺住職

袴田俊英老師



教化資料作成委員／宝昌寺住職
コーディネーター

新川泰道老師



は、自死予防や自死遺族にどのように向き合うべきか、といった内容を取り上げ、今日に至っている。

平成十九年の暮れに先住が遷化し、翌年四月一日に秋田県の長禅寺住職を拝命した。その中で檀家の自死に向き合う事や民生委員として活動している中で相談活動をしている事などのお話をさせて頂きたい。

【袴田】「心といのちを考える会」（藤里町）と「ふきのとう県民運動」の代表として、自死問題に取り組んでいる。

宝昌寺の先代さんからこのような問題があると教えて頂き、自死問題に取り組んだ。吉岡尚文先生（当時、秋田大学法医学教室教授）をお招きして講演会を開催したのが平成五年であった。

吉岡先生が秋田県で最初に自死の多さに警鐘を鳴らした背景には、秋田県警と法医学の吉岡先生との密接な関係があり、検死の状況などから自死者が多い事に気が付いたからである。

その後、先生の研究室に通うようになり、藤里町の自殺率が高い事を知った。藤里町の人口が約三五〇〇人で十万人比の自殺率で計算すると二人亡くなると秋田県内でトップの率になる。自死予防の活動によって死者は徐々に減ってきているが、秋田

■日時／平成27年11月24日
■会場／サロン「よってたもれ」
秋田県藤里町



県内ではトップクラスとなっている。この町で何が一番必要なのかと考えた時に、もう一度農村の中で人の繋がりを考えていく事と思い、その実践としてサロン「よってたもれ」を行っている。

二十年以上前は自死に対して世間のタブー視が強く、行政もマスクミも私たちも関わるのが難しい時代であった。近年の自死対策や自死の現状について感じることを

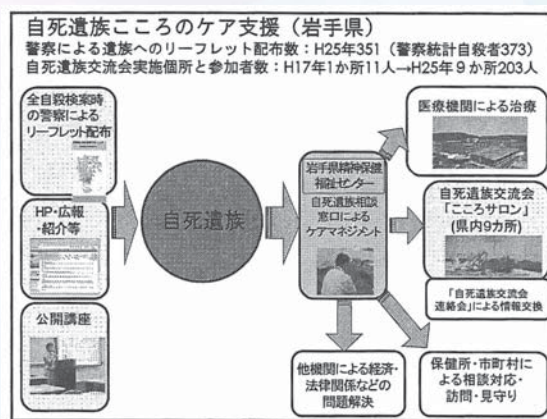
【黒澤】この十年の取り組みは、精神不調の回復や社会的問題解決の支援をしたり、後追い自殺を防ぎたい思いで、地域の中でどんな仕組みを作れるか考えてきた。どんなグループとかケアの輪を作って支えたら良いのか、また個別の相談に当たってはどんなふうにするのか、そのケアや心理療法・精神療法をしていったら良いのか、それを職員の人たち保健師さんの人たちにお伝えして、どのように定着させたらいのか、人材育成や技術支援に取り組んできた。

東北全体の共通の問題だと思いますが、岩手県もやはり医療機関や医師不足もあります。なかなか十分な資源もありませんので、取り組みは地域の繋がりを作っていくなどの包括的な自死対策が大事だというふうに思っております。

秋田県の取り組みは当時先進的だったので、それを参考にもしました。岩手の県北の久慈地域でモデルとなる包括的なプリベンション（予防措置）・インターベンション（治療介入）・ポストベンション（事後対応）や、精神障がい者の対応や産業保健への取り組みをネットワークによって繋がりを広げていくモデルづくりを推進してきた。実施に取り組んでいる市町村は三十三市町村の内、この十年で三十三市町村となっているが、まだまだ自殺率が高い地域であるので、これからも続けていく必要があると考えている。

自死対策のポストベンションの環と

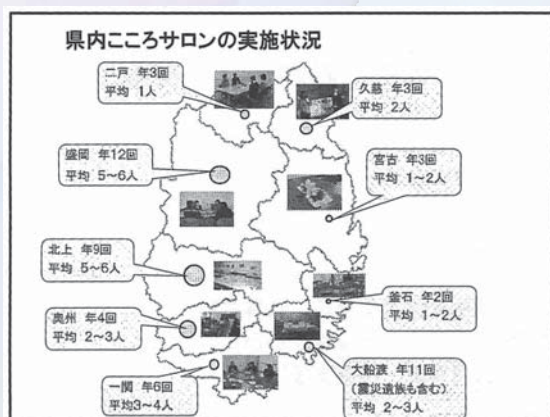
して自死遺族ケアに取り組んできているが、単独での取り組みではなかった。岩手県の対応として「自死遺族こころのケア支援事業」を行っている。



警察の検案の際に自死遺族にリーフレットを配布。自死の数が一年に三四一人（平成二十六年）の場合にはその数のリーフレットが配られる。その中に専用の相談窓口の情報が掲載してある。またホームページなどでもサイトによる周知や色々な情報提供をしている。

相談頂いた自死遺族に対してケースアセスメントをして治療の必要な人には医療機関で治療をして頂く、自死遺族交流会を県内九カ所に立ち上げご参加頂く、見守りや精神福祉セ

ンターの個別の診療を行っている。



沿岸部が繋がりにくい状況があり、内陸部の参加者が多い状況。サロン自体は分かち合いで、盛岡市では遺族同士での開催をされている。

一方で私が十年関わってきて、自死遺族支援というのは筋縄ではない「地域での自殺の講演はしないで欲しい」という声もあるが、遺族や住民の方が積極的に取り組むべき事で、やってみようという人もある。うつ病対策の講演会で泣き出す遺族へちゃんとした相談対応が取れていないと、次に繋がらなくなる。形ばかりの啓発活動になつてしまう。

遺族会のボランティアに参加される方で、どうしても自身が遺族の場合に葛藤があると周りの方と上手く

訪問させて頂いた際に、その時々のご遺族の精神的状況、肉体的な疲労の度合いなどに気を配り、お話を聴かせて頂くようにしている。

実際お亡くなりになられて初七日あたりは、一番悲しまなくてはならない、悲しみを受け止めたいご遺族もお葬儀の準備とかいろいろな差配の中で、悲しむ間もないほどに時間を費やしてしまっている。

二七日あたりにはご家族だけになり、一人になる時間が出来る。悲しみがどつと重くのしかかる時期であつたりするので、こちらで気持ちを慮つてお声掛けをさせて頂いている。悲嘆を引きずる事がないのか配慮しながら向き合わせて頂いている。「周忌や三回忌でも同じ気持ちで接している。

ただ読経をするだけではなく、ご遺族の方々の心に向き合っていきたい。【袴田】自死問題と関わった当初はタブーの問題があつた。「寝た子を起すな」「なぜこの町でこういう問題を取り上げるのか」という言われ方をされながら行ってきた。タブーがある間は遺族のケアもうまくできないし、今悩んでいる人に近づけない。そのタブーをどうやって破っていくのか。プリベンション、最初の啓発が何より大切な事だと思つてやってきた。

秋田県の自殺率が一番高かった時が平成十五年、自死で亡くなった方が五二九人。昨年が二九六人でおよそ半減となった。やはりタブーを取り除く努力が実つてきた時に、相談機関の機能や専門家の関わりが効果を上げることになった。顕著であつた中高年の自殺率は下がっているが、若い人と高齢の方々の自死が相変わらず多い、相対的に自殺率が高くなっている。

疎外されているとか「自分が生きていていいのだろうか」という風に思つていく社会に今なつてきている。これまで余りにも抽象的で余りにも観念的だといわれてきたような、生き方や人生の意義を問うことが僧侶として今、大事なところだと感じている。

これまでは警察統計で「こうゆう事を悩んでいました」という原因が見えていた。例えば経済問題とか病気の問題とかある程度つかむことが出来ていたが、昨年から分かんなくなつてきた。自己有用感、存在意義のような深い意味の問題が見えてきているような気がする。

今までの対策では様々な苦しみにそれぞれの専門家が関わって防ぐことが出来ていた、もしくは効果を上げていた事がある。これからはもう一歩踏み込んだ新しい展開が必要なのではないか。

いけない時がある。この様な方へのサポートや支援が必要。

自死未遂の方へのケアをしているが、既遂した場合の家族へ支援が必要。自死遺族支援を充実させていくには、自死遺族対策以外にも事業を展開する事が不可欠。自死対策を始めるには自死遺族の取り組みも必要不可欠と感じている。その定着には遺族の存在抜きには続けることが難しいと感じている。

なかなか自死対策や自死遺族対策が進まない地域の場合には、「生きること」「死ぬこと」「価値観」「人生なにを求めるのか」といった話し合いから始める処から行かないと難しいのかな、この十年の取り組みの感想。

【金子】住職を拝命して間もないころに、檀家さんで大学卒業後就職した東京の寮で自死した息子さんの葬儀の際、両親が東京からご遺体を秋田県に運んできて火葬となったが、精神的にバツクとなった母親が大事な一人息子の棺にしがみつき、火葬炉の扉を閉じられない状況であつた。親族や斎場の職員も母親に離れるように促すが、母親は聞き入れず精神状況ではなく、結局、私が、母親を背後から抱え引き、棺から離れさせざるを得なかった。葬儀後母親は食事もと

新しい展開をしていく時、専門家の方々それから私も宗教者が民間の様々な活動をしている人に対してしっかりと連携してゆく事が大事。

「傾聴」が目ざされているが、相談活動の問題点やそれぞれの立場の中で日頃思っている事」

【黒澤】困っている人に偏見があると近づけない、近づかないと精神医学的にも自然治癒を妨げる、自分は悪かつたと罪悪感がある自分を責めて引きこもつて孤立すると自死遺族の回復力を妨げるので、孤立させない「傾聴」は大事なテーマである。

【袴田】その人が立ち直っていくためにどうするか「傾聴」はそのために重要なファーストコンタクトです。その人を取り巻く状況を聞く為にも必要。傾聴活動は聞いて終わっては何もならない。その後にお互いに話すことが重要で、傾聴ボランティアの学習でも「話を聴く事」に重点を置いているが、傾聴の後が大切だ。

【金子】僧侶は高みに立つて説法する傾向があり、困った方の状況を聞いても自分で解釈し、説教してしまう傾向がある。その方のかかえてお

れず、言葉を発することができない状況で、一年余り入院したということがあつた。

またおばあさんが自死をされたケースでは、その息子達が集まった際に、同居していた長男家族との間で、自死に至った要因を巡って仲違いとなり、葬儀の準備すら難しい状況となった。住職としていがみ合っている親族一人一人と個別にお話をお聴きし、自死について理解を求めまた葬儀の意義を伝え、ようやくしてお葬式を執り行うことができた。

当時は、自死に関しての理解の欠如や、さまざまな悩みや、あるいは自死について口外し難いというような田舎社会の閉鎖性を強く感じた。また長男に先立たれた母親の悲嘆の度合いをまざまざと感じた。この様な事に住職として改めて取り組んでいかなくてはならないという思いを強くした。

そうした決意もあり、総研のプロジェクトの中で「人びとのこころにどう向き合うか」を研修してきた。自坊では、寺院玄関正面に「あなたのお話お聴きします」他人にとつて些細なことでも貴方にとつては重大な問題ですから」と掲示して、一般の方の相談を承つたり、檀務の中では、初七日から始まる毎七日の七日行や、月忌行でご遺族のご自宅を

られる思いを吐露して頂く環境づくりをして、その方の思いを聴かせて頂いて一緒に寄り添いながら、この問題はこうしていったらいいのではないかと、一つ一つ困った事を解決していく、その先に仏教の教えの見地からの話があつても良いのではないかと。

言葉にならないような仕草によつて発せられるような様々なサインをも気づいてさしあげて、その方の思いを聴いてあげる。

「傾聴」を学ぶ事で宗侶の資質の底上げになっていくのではないかと考えて、前述のテキスト「学科編」「資料編」「実践編」を平成二十年に刊行した。

「学科編」は最低限知っておきた



い心構えとか苦というものはどういう状況から生まれてくるのか、学科学的な内容をまとめたもので、「実践編」にはロールプレイをしたり、手紙体験の模擬体験をして、実際に相談活動に入っていく上での実践をして頂く。

「資料編」は実際に僧侶の方々が繋ぎ役となり、困った方々の状況に併せて繋ぎ先を見つけておく資料として作った。これらの事を学んでおくことと取り組みやすくなるのではないかと考えた。

特別な人が悩んでいるのではなく誰にでも起こりうることでと理解する。

自死遺族に限らず一般の方々にも、一つは深刻ではなくとも、複数の悩みが折り重なって、大きなストレスとなり、自死念慮を持つこともあるので、その前に二つ悩みの種を解いていく事もプリベンションという視点から「傾聴」を学んで実践して頂きたい。研修で学んでもなお不安な方へ「相談活動のはじめ方」という冊子を作成したので、これを参照し、足掛かりとして頂きたい。全ての宗侶が最低限の知識として「傾聴」を学んでほしい。

【袴田】「傾聴」によって生まれてくるのは信頼関係だと思う。その人が「もう一度生きていこう」と思う事。

がけん引している今のグローバル経済の中で生きていかざるを得ないところに混乱が起きているのではない。しかも死の垣根を超えやすい事も東アジアの生死観と見ていかなければならない。そこをどう転換していくのかもまた価値観に繋がっていくのではない。

【金子】私の所に相談に来た方で、ネフローゼを長く患われていた元大工の旦那さんが、テレビで、東日本の被災地にお風呂を作る支援について報道されているのを観ていた際に、旦那さんは自分がそこに行つて自分の手でお風呂を作ることが出来ないと言つて命を絶たれた。遺骨をもって相談にこられた奥様は「出来ないんだ」と言つた旦那さんに仕事に行く前に声を掛けられなかった事が自責の念で相談に来られた。この事は自己有用観から役に立たないと思つた時点で自死のキッカケになつてしまった。様々な悩みが折り重なり追い詰められてしまった精神状態で、「自分が役に立たない」故に「存在する価値がない」と思つてしまうと、本当に命を絶つてしまわれることに、驚きと、その自死者の苦悩の深さを感じた。

私の第二子は、ダウン症で、出産時には新生児仮死であつた。妻はシヨ



生きる支援につながる。

―死を受容する意味からの葬祭について。法要の力についてどのような考えか―

【金子】平成二十年から自死者供養の会「祈りの集い」を開催。法要↓ご焼香↓メッセージの奉納↓黙禱、終つて茶話会を行っている。

「自殺した人は成仏するんでしょうか?」実は、自殺した人は命を粗末にしたから成仏せずに地獄に行くんだと裏でゴソゴソ言われました」

「真面目で一生懸命だったうちの夫が自殺をしただけであんな事を言われ」ツクから自殺未遂に陥る程の状況になつた。保育器の中で、鼻や手足に管を刺され、身動きが取れない赤ちゃんとあつたが、声を掛けると唯一下唇だけを反応させてくれた。これを見た私たち夫婦は、この子が必死に一生懸命生きようとしている、私たちと出逢い暮らしていこうとしていると感じ、「一緒に生きていかなければならない」という決心ができた。障がい児として生きていかなければならない、社会の価値観の中でどれだけ社会貢献できるかわからない、「人の役に立てる」かどうか分からない状況で不安や絶望に苛まれていたが、一生懸命生きようとしている子供に、私たち夫婦は救われたような気がしている。

実際障がい者の方とかが高齢の方を見ていても、本当に一生懸命に生きていて下さればそれでいいんだと思つてしまうように私自身がなつてしまつた。それ以上の価値観を求める必要がないところもあるんじゃないかと思つている。

自分に存在価値が無いんじゃないかと思つている人に寄り添わなければならぬ。障がい児と触れ合っているとこちらの方が生かされる思いがしている。

るのが悔しい」と話されたりする。

私たち宗教者は故人と遺族をつなぐ場をつくる存在として、法要というものにもっと自信を持つていいだろう。参加される方の中には自死という事で親戚にも言えず、葬儀もできなかったとか、自死ということからくる気まずさから法事をやらなくなつた方もいる。そうした遺族にとつて、この会が故人と安心して向き合える価値のある場所となつていく。

葬儀とか七日毎のご供養や年回法事などでも故人がどのような思いで過ごされているか遺族がどのような思いで故人と向き合つたらよいのか、故人と遺族の方々をつなぐ場として宗教者は法要を執行していかなくてはならない。

【袴田】平成十五年に秋田県曹洞宗青年会が「祈りの集い」を行った。そこで一番尻込みをしたのが僧侶側だった。研修を経て二年に一度開催している。菩提寺と檀信徒はメンバーシップとして固定された関係なので、本当の心情が吐露できないこともあるような気がする。

【黒澤】精神医学の視点からも故人と遺族をつなぐ意味でも故人を身近に感じられる法要は大切な場で、本当に悲しむ場、故人について話し

―最後に一言―

【黒澤】これから自分の立場でどう向き合っていくのか大変参考になった。

【金子】総研ではいろいろ発信している。「自死にどう向き合うか」というこのテーマに関して、僧侶が取り組むべき事はどのようなことか、寺院はどのようにあるべきかということ、既にハッキリしている筈である。全国曹洞宗青年会や地域で取り組んでいるところもあるが、点と点を線で結び、ネットワークを確立し、曹洞宗全体として本腰をあげて取り組んでいくべき時期であると考えている。

【袴田】サロンを始めて十二年を迎え、自死問題に取り組んできて学んだこともありますが、僧侶としてどう考えた

合う場であつた。これは複雑性悲嘆を防ぐうえでも大事なことで死の最終性を理解して、その次に新しい報酬系を作ることが必要であり、法要の重要な要素でもある。法要に出来ないのが医学的にはハイリスク。悲しみに向き合う時間を作ることが悲嘆からの回復につながる。

―これからの自死への取り組みについて、「死生観」を問われていると思いますがいかがか―

【黒澤】自己価値観をどう高めるのか、どう変えて行くかはサロンのような活動の積み重ねで良いのではないかと、自分が声掛けをしていくとか席を譲るとかの小さい事のやりとりからでも良いのではないかと。

【袴田】東アジアの死後観は現世と近いところに死後があるという考え方があり。西洋の天国と地獄とは違つた感性がある。死の垣根が二神教より低いのではないかと。いま世界的に自殺率の高いのが韓国、日本そして中国。中国はWHOにはしっかり報告していないが、たしか中国の保健院が一生懸命自死対策を行つていると言われている。

もしかしたら死後観の違う西洋

らしいのかということも勉強させて頂いた。平成十八年に自殺対策基本法が出来て、まだまだ本当に根付いてこの問題に対して社会全体で取り組みという機運が生まれていないような気がする。

それでも自死の問題を通して社会の有りようを考える人たちが増えてきたことは確実な所だと思う。社会を作っているのは私たちみんなです。この社会が生きづらくなっているのは何なんだろう、その生きづらさを取り除くのはどういうことがあるんだろうと真剣に考えて行くこと。

今対策が打たれ自死の数は減少してきている、それだけ世の中の空気がほんのちよつとだけ変わつてきていると考えてもいいのではないかと。僧侶も社会を構成する一員としてこの問題を見据えて行く事を怠つてはいけない。

会場紹介

サロン「よってたもれ」

■ 毎週火曜日

午後 1:30~4:00

■ 藤里町三世代交流館 1Fフロア



www.kokoro-inochi.net

被災地のお寺は今

第6回

東日本大震災からの復興

岩手県陸前高田市米崎町字
地竹沢 181
普門寺 熊谷光洋

東日本大震災の後、お寺の役割を再認識いたしました。それまでお寺はお釈迦様の教えを伝える伝道の道場だから教えを説くことが一番大事なことと思ってきました。しかし震災の後、多くの被災者、亡くなられた遺族の方、特に行方のわからない方々のご遺族に接し、何も話すことができないでいる自分がおりました。

ある日の早朝、仙台から中年のご夫婦が来られました。息子さんが行方不明で、朝の読経に参列したいといわれました。しかしそのときに、早朝から葬儀の相談など続いており、朝課をしておりませんでした。そのご夫婦にはお焼香だけでお帰りをいただきました。後になり仙台から朝早く高田にむかってきたご夫婦の心境を思う時、何もできなかった私は自責の念に駆られました。その後、親友の一人から「こんな時おまえに何もしなければなくて申し訳な

い。せめて私は朝課の読み込みに陸前高田市東日本大震災物故者諸精霊供養をしています」という手紙が来しました。うれしくて感動しました。私は教えを説くことが重要だと決めつけていましたが、一生懸命故人の冥福を祈ることも同じくとても重要であり、このように沢山の方が亡くなられた災害の後、信仰心が増すと聞きました。

そのとき私は供養の読経は特別に行うのではなく、朝のお勤めの中にすべて含まれていることを改めて知りました。その日から朝課の大切さをしみじみ感じています。

様々なご縁が集まり今、石の五百羅漢様を一般の方々とともに彫っています。今年で四年を経過しました。現在三三五体になり、今年か来年には満願成就します。他に千体仏二三〇体の佛像などが奉納されました。また京都の版画家・井堂雅夫さんより阿弥陀如来と二十五菩薩来迎図、香川県観音寺市の仏師・荻田文昭（凡海）さんから阿弥陀如来と十六菩薩来迎像の奉納が続く、その数が陸前高田市の震災で亡くなられた、八〇〇人に限りなく近づいていることに気づきました。他に京都の方から「二度と散らない、ねがい桜」の奉納をいただいております。これは古くなった襦袢などを桜の花びらにかたどり縫ったもので、吊し雛の一種です。この花びらの中に願い文を入れ一八、五五〇個の奉納を目指します。この度の震災で亡くなられた方々の総数です。全国か



ら寄せられた仏像や吊し雛に亡くなられた方々がすべて安心できる場所に向かわれたことを形で表すことができたような思いです。娘さんが未だ行方不明のご家族の方の「このお寺に来ると娘と会えるような気がします」という言葉に私が救われた思いです。多くの方々とのつながりが増え、お寺が被災地の希望となるように毎日を暮らしております。皆さん本当にありがとうございます。



教化センター布教師紹介

平成 27 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

東長寺住職
岩手第一二教区二九七番



東井千明 師

功岳寺住職
宮城第一一教区二七二番



関 弘爾 師

天徳寺住職
福島第十六教区三一二番



細川正善 師

泉高院住職
山形第二二教区二八五番



山岸俊道 師

楊柳庵住職
山形第一六教区七九番



木村尚徳 師

清涼寺住職
青森第四教区三八番



柿崎宏隆 師

教化センター布教師の派遣につきましては、教化センター又は直接ご本人にご連絡ください。

光岸寺住職
秋田第一四教区一二九番



佐藤道彦 師

見龍寺住職
山形第三第一〇教区六二二番



池田好斉 師



☎ 0120-0874-24 (教化センター)
☎ 024-545-4119 (福島県)
☎ 0120-621-602 (岩手県)
☎ 017-774-6655 (青森県)
💻 <http://soto-akita.com> ビデオ法話 (秋田県)

法話「仏の誓願」

上来三帰、三聚浄戒、十重禁戒、
是れ諸仏の受持したまう所なり

修証義第十五節



教化センター布教師
佐藤道彦

「仏の誓願」

お釈迦様のみ教えに

「もろもろの悪をなさず

多くの善を行ひ

自らその心を浄くすること

これが諸仏の教えである」

というお言葉がございます。

私たちは何かをしようとした時、自己の損得が働くことはないでしょうか。周りを顧みず、自分の欲求を満たす為だけに本能のおもむくままに行動してしまったり、悪いこととはわかっていても問題が生じなければ構わない、などといった自己中心の考え方では社会生活はもちろ

んのことと自己の生き方についても正しいものとはいえないでしょう。世の中に自分一人しか存在しないのであれば構いませんが、私たち人間は周りの存在がなければ到底生きていくことは出来ないのです。だからこそ一歩一歩確実に歩みを進めていくための指針が必要になるのです。

道元禅師様は三帰戒・三聚浄戒・十重禁戒の十六ヶ条の戒法（仏心のはたらき）を定めて仏弟子の心構えを示されました。

● 仏法僧の三宝を心の拠り所と
しなさい（三帰戒）

● 悪いことはせず、善いことをし、他の人々を救済しなさい
（三聚浄戒）

● 仏道修行のうえで、十の重要な生活規律を守りなさい（十重禁戒）

三帰戒は仏弟子としての「目覚め」であり、三聚浄戒は「誓い」、そして十重禁戒は「おきて」といえます。道元禅師様が示される心構えとは仏法僧の三宝を心の拠り所とし、その上で自己を見つめ直し、周りにも目を配らせ、皆が幸せになるよう一人一人が願ひ努力していくことなのです。これこそがまさに自らの心を浄くする「善き行い」といえるでしょう。道元禅師様はこれら十六ヶ条の戒法は歴代の祖師方が受け継ぎ、実践してきたもの（受持）であるから仏弟子である私たち

も実践していかなければならないとお示しになっているのです。いわばこの「十六ヶ条の戒法」こそが私たちの進むべき道といえるのです。

めまぐるしく変化し続けるこの世の中ではありますが、お釈迦様、道元禅師様より受け継がれてきたみ教えはいつの世でも私たちの進むべき道を示して下さいます。その根底には、皆共に仏道を成ずる、という歴代の祖師方の誓願があり、実践があるのです。私たちはそのみ教えの中に生きるものとして自身を進むべき道を見失わないように日々精進していきたいものです。

（秋田県 光岸寺住職）

平成二十七年 行事報告

禅をきく会

・平成二十七年六月十四日
・岩手県奥州市「正法寺」

・法要 大本山總持寺二祖
峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌

・講演 講師：正法寺住職 盛田正孝 老師
「両箇の月を感じて」

・対談 出演：俳優 綿引勝彦 氏
大本山總持寺副監院心得 山口正章 老師
「相承—みちのくに拓く」

・坐禅 指導：東北管区教化センター 高橋哲秋 統監

・参加者 四〇〇名



曹洞宗婦人会東北管区研修会

・平成二十七年七月七日～八日
・山形県鶴岡市 あつみ温泉「萬国屋」

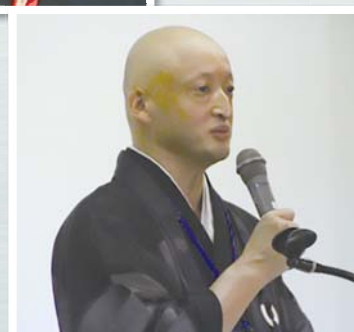
・講師 鶴岡市社会福祉協議会 村井勢一さま
「被災地支援の活動と今後の展望」

・曹洞宗復興支援分室・福島県龍徳寺住職 久間泰弘さま
「復興支援活動から観える被災地の子どもたち」

・口演 落語家・天台宗僧侶 露の団姫さま
「仏は君をホットケない」

・参加費 一万二千五百円

・参加者 三百六十六名



青少年教化指導者研修会

・平成二十七年九月一日～二日
・仙台市 「メルパルク仙台」

・講師 ライフ・ターミナルネットワーク代表 金子稚子 先生
「死ぬことから考える、生き方」

●北信越管区教化センター統監 増田友厚 老師
「進一歩の手がかりを探ろう」
（共に願い、よりよい歩む）教化活動

・人権学習 DVD 「向きあう 伝える 支えあう」

・事例発表 各宗務所より八名

・参加費 一万五千円

・参加者 七〇名



第四十五回 教化フォーラム

・平成二十七年十一月十一日
・仙台市 「メルパルク仙台」

・講師 種智院大学 人文学部准教授 スタン・シヤキャ 先生
「お釈迦様のふるさととネパール仏教」

・参加者 十九名



特派布教と青森県伝道車巡回布教

・特派布教師 静岡県大覚寺住職 稲石文乗 老師

六月十九日 松丘保養園
六月二十日 五教区 海傳寺
六月二十一日 八教区 長弘寺
六月二十二日 四教区 夢宅寺
六月二十三日 六教区 常現寺
六月二十四日 七教区 東圓寺
六月二十五日 三教区 延寿院
六月二十六日 二教区 昭傳寺
六月二十七日 一教区 盛雲院



布教講習会

※布教師特設検定会併催

・平成二十七年十月二十七日～二十八日

・岩手県北上市 「シティプラザ北上」

・講師

●岩手県正法寺住職 盛田正孝 老師

「坐禅を実践する僧侶」

●特派布教師・福島県長楽寺住職 中野重孝 老師

「宗門の布教」・「法を伝える」

●人権啓発相談員・東京都大泉寺住職 久保井賢丈 老師

「宗門の問題、私の問題」

・参加費 一万五千円

・参加者 六十六名



布教師特設検定会

・合格者数

令命一等 十名

令命二等 十一名

東北管区教化センター設立四〇周年事業

慰霊と復興祈願の行脚「祈りの道」趣意書

曹洞宗東北管区教化センターは、本年十二月一日に設立四〇周年を迎えます。

顧みるに、昭和六十三年の一〇周年には16ミリ映画『いのち―道元禪師』の制作・『東北寺院便覧』の発刊・記念講演とパネルディスカッションが行われました。更に二〇周年の平成八年には、仙台サンプラザを会場に二、〇〇〇名を超える参加を得て環境問題に関する基調講演とポール牧氏による「死刑囚―島秋人の生涯―」の公演を開催しました。先の平成十八年の三〇周年の折には、板橋興宗禪師と玄侑宗久先生との対談とカンボジアへの移動図書館車贈呈がなされています。

教化センター設立四〇周年を間近に控えている今、私たちは東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原発事故を抜きにして考えることは出来ません。

瓦礫や泥まみれになって無惨に破壊された伽藍、何一つ残さずに更地と化した境内、九割以上の檀信徒が家屋を失った寺院、半壊状態のまま避難所となったお寺、遺骨やご遺体に埋め尽くされ、安置所となったお寺、放射能汚染で住むことさえ許されなくなった地域等々、甚大な被害を受けました。ライフラインも寸断されている中、多くの財産を失い、僅かな食料で救助もないまま高台で過ごした人、着の身着のまま避難所生活を送った人、半壊の自宅で自活を目指す人など、未だ曾てない体験をしました。そして何よりも住職寺族合わせて十三名を含む一五、八九〇人の物故者と未だに行方不明の二、五八九人の被災者がいます。

あれから五年近く経った今、自助・共助・公助などにより復旧復興を目指していますが、居住不可

能な土地や復旧を望めない地域も少なくありません。また、一見して復旧したように見えても、経済や仕事に不安を持つ人や被災体験がトラウマになっている人、仮設住宅等での生活を余儀なくされている人、心に不安を抱いている方々も多くいます。

宗門寺院にあっても、廃寺を決定した寺院、復旧や修復の目的が立たない寺院、一部修復だけの寺院、復旧や再建を果たしても檀信徒が激減した寺院等々、それぞれが固有の問題を抱えており、完全復興に至っていないのが現状と言えます。

以上のことを踏まえ、教化センターの教化活動推進委員である東北管区内八宗務所の所長が四〇周年事業の運営委員となり、各宗務所の教化主事を中心に実行委員会が組織されました。

具体的には、管区内の互いが

心を持ち寄り、大津波で被災した地域を五月六日より北は宮古市から、南は南相馬市からリレー形式で物故者の慰霊と復興祈願の行脚を致します。五月十一日には南北の合流点である石巻市洞源院様において物故者供養と復興祈願法要を修行致します。

この事業により、東北管内全宗務所が慰霊と復興の祈りを胸に心一つにしていくことが、東北の力強い未来へ新たな一歩を踏み出すことになるかと確信致します。

行程の都合上、甚大な被害を受けられた御寺院様であっても、拝登させていただきたい御寺院様には事前にご相談を申し上げます。

以上、本事業に対しまして、ご理解ご協力たまわりますよう宜しくお願い申し上げます。

曹洞宗東北管区 管区長

佐藤 良裕

曹洞宗東北管区教化センター 統監

高橋 哲秋

平成二十八年度 禅をきく会

ご案内 参加費 五〇〇円

午後二時三〇分

仙台会場

●第一四八回 平成二十八年四月七日(木)

元NHKアナウンサー 村上信夫 さん

「嬉しいことばが自分を変える」

会場…楽楽楽ホール

●第一四九回 平成二十八年六月一日(水)

千葉県宝林寺住職 千葉公慈 老師

「やさしい唯識のお話 ―心のしくみを考える―」

会場…楽楽楽ホール

●第一五〇回 平成二十八年八月三日(水)

作家 井沢元彦 先生

「仏教と神道」

会場…楽楽楽ホール

●第一五一回 平成二十八年十月二十七日(木)

東北福祉大学学長 大谷哲夫 先生

「はてしなき求道の旅」

会場…楽楽楽ホール

●第一五二回 平成二十八年十二月一日(木)

沖縄民謡歌手 古謝美佐子さん&うないぐみ

「弥勒世界報」

会場…東京エレクトロンホール宮城

●第一五三回 平成二十九年二月一日(水)

愛知専門尼僧堂長 青山俊重 老師

「今ここをどう生きる ―摂ぶ人生と授かりとしていただく人生と―」

会場…楽楽楽ホール

曹洞宗東北管区教化センター
設立40周年記念事業



曹洞宗

ルート

開催日

平成28年

5月6日金
5月11日水

5月6日
宮古市 常安寺 出発

5月6日
南相馬市 同慶寺 出発

5月11日正午
石巻市 洞源院 着

東北6県 僧侶による行脚
5月11日午後2時 慰霊・復興祈願法要(石巻市洞源院)

東日本大震災 慰霊行脚

あんぎや



主催 曹洞宗東北管区教化センター

TEL.022-218-1381 <http://soto-tohoku.net/>

曹洞宗 東北 検索

